

山びこ村の二人

むかしむかし、山びこ村に、五郎と平八という、わか者が住んでおった。

五郎は、働き者で、いつも朝早くから畑仕事に精を出しておった。平八も畑をたがやすが、まあよく休む。働きだしたと思ったらすぐに道具を放り出して、すいっとつりに行ってしまおうというありさまじゃ。

当然、五郎の畑ではたくさん野菜がとれるが、平八の畑ではあまり野菜がとれん。五郎が、とれた野菜を村の人にふるまうことはあっても、平八にはそんなことはできんかった。

また、五郎は、こまっている人の手伝いまでするので、村のみんなからたよりにされておった。平八も、たまには他の人の手伝いをすることもあったが、のろのろとして仕事はおそいし失敗ばかり。そんなもんだから、平八といっしょにいようとす村人は、あまりおらんかったんじゃ。

ある日、この様子がこっそり村の様子を見に来た。その時、五郎はいつものように自分の畑を一生懸命にたがやしておった。自分の仕事が一だん落つくと、今度はおとなりさんの畑を手伝いに行く。

この様はそんな五郎を見て、





「あのわか者はよく働くのう。」
と言うと、家来に小声で何やら言いつけた。

しばらくすると、との様から五郎の元に、食べきれないほどの米、野菜、魚、りっぱな畑仕事の道具、みごとな着物がとどけられた。五郎はたいそうおどろいたが、集まってきた村人たちに向かってこう言ったんじや。

「おとの様からごほうびをいただいて、うれしいかぎりじや。でも、わし一人ではこんなに食えんし、畑の道具や着物はもう持つておる。せつかくのごほうびじや。食べられる物は山びこ村のみんなで食べて、道具や着物はこまっっている人で分け合うことにしたらどうじゃろう。」

それを聞いた村人たちはたいそうおどろいたが、
「なんとも五郎らしいのう。」
と、みな笑顔でうなずいた。

次の日、山びこ村の一本杉の下で、大きなうたげが開かれた。五郎はいつものように、にこにここと村人たちと話していたが、少し気になることがあった。

「権じいさん、平八がいよいよじゃが、どうかしたんじやろか。」

五郎にそなたずねられた権じいはい、苦い顔でこう言ったんじや。

「五郎よう、平八のように村の役に立たん者はうたげによぶ必要はなからう。おまえも平八には、何もしてもらっておらんじやろう。平八には声をかけんかったよ。」

それを聞いた五郎は、めずらしく強い言い方で返した。

「それはいかん、権じいさん。わしは山びこ村のみんなでお祝い
がしたいんじや。平八も山びこ村の一人じやろう。わしも平八
とはあまり話さんが、のけ者にするのはいやじや。」

さらに一息ついて、五郎は続けた。

「わしが、今から行って、平八を連れてくる。」

五郎は、村はずれの平八の家まで走っていった。平八は、家の
中で一人さびしく、ひざをかかえてすわっておった。

しばらくして、五郎は平八をうたげに連れてきた。五郎と平八





は、ずっと楽しそうに話しておった。いつのまにか、他の村人たちも集まっていっしょに話し、大きな声で笑い合った。

それからというもの、平八は、人が変わったように働き出した。得意な魚つりに精を出し、いつのまにか山びこ村でもひょうばんの漁しになったんじゃ。たくさん魚がとれたときには、こまっている家のえん側に、だまって魚を置いていくこともあった。畑の五郎と魚とりの平八、二人の働きで、山びこ村は、おかしよりずうっとゆたかな村になったそうじゃ。

(野村 宏行 作)